

おります。また余暇を利用しては、水墨、俳画、俳句等にも心を遊ばせています。

毎月の八日の日―大戦記念日―には散華した戦友の冥福を祈り、日本の繁栄と世界の平和を切に念じております。

ドンゴロスの兵隊 (二)

岡山県 田上 建

留置場から刑務所へ

北青の留置場で半数の同僚と別れた日から一週間経ち、再び呼び出された。今度は警察官の人達と共に三十人であった。外に出ると以前に増して太陽は眩しく、その上今度は足はガクガクして歩けない。暗い二週間の生活がこのようにまでなるのかとさらに驚いた。

出発に先立ち、元警察の黒い作業衣を一着ずつもらった。その時の私達は夏の襦袢と袴下の姿であっ

た。ソ連兵の指示でトラックに乗ると、自動小銃を持った兵が六人乗って来た。トラックは北青駅の貨物のホームに横付けされて、そこで有蓋車に乗せられた。我々三十人は奥に押しやられ、片方の扉を明けた入り口には、賑やかな六人の兵が陣取った。口笛を吹き、大声で歌い、また笑うなど口の休むことを知らない兵隊たちであった。

やがて列車は動き出し、駅に止まる度に物を売る女の甲高い声が聞こえて来た。二駅も過ぎた頃、ソ連兵は持ってきたリュックサックの中から美しい着物を取り出して交換を始めた。日本人の家から持ち出した物であろう。着物を一枚渡す度に、貨車の中にはゆで卵が積み上げられる。あの卵の山をどうするのかと思っていると、空腹を抱えた私達の見守る中で食べ始めた。まず靴の踵で殻を割り、そのまま口の中へ放り込む。口の中から次々と殻を吐き出し、全部吐き出すまでに次の殻を割っている。六人の兵が競争で口へ放り込んで吐き出す姿を我々は茫然として見ていた。一人の兵が三十数個の卵を食べて平然としているのにも

驚いた。

今度は小さなリュックサックから小麦粉を鉄板に流して焼いたものを一枚食べて食事を終えた。次の駅からは色々な品が交換されたが、その空腹に耐えている私達の眼が気になったのか、塩辛い干し魚のメンターイを投げてよこした。それを分けあって食べたものの、今度は水が欲しくなってしまう。

貨車の奥にいる私達には、どこを走っているのか、どこへ行くのかわからず、一週間前に別れた人達や梨本准尉さん達のことなど噂をする一方で、若い我々は一人の兵隊に五人掛ければソ連兵を投げ降ろすことができるのではないかと意見が出る。言葉が互いに分からぬだけに気楽に口に出して話していた。

水も食料も無い空腹の旅であっても小便はしたくなる。手真似で頼み、停車した小さな駅のホームへ皆喜んで降りようとすると、「貨車の上からせよ」と六人の兵が自動小銃を小脇に抱えて前に立つ。急いで始めようとするとソ連兵が一斉に笑い出した。あれだけ我

慢をしていた小便が出てこない。次の駅で今度こそソ連兵を見ないようにするが、高笑い声を聞くとやはり今度も出ない。やっと夕暮れの咸興駅に着いて下車できた。早速線路の横に並んだ我々は、急げ急げと叫ぶソ連兵を横目に、止まらない小便の放列を敷いていた。

間もなく暗くなった道を元気なソ連兵が先頭になって進んで行く。二週間の留置場の生活で足がガクガクして歩けなくなった我々を、ソ連兵はどこにあったのか柳の枝を持って、「ダバイ、ベストライ」と急がす。逃亡を警戒して前後左右から連射する自動小銃の火が、まるで火花を見るように美しかった。

咸興の町並みを過ぎた頃、一軒家の理髪店の前に座らせられた。そこへ奥さんがバケツに水を入れて持ってきて来た。その水を我先にと飲む姿を見て、何度も何度もバケツで運んでくれた。人心地がついた。

しばらく走ってトラックから降ろされた所は、連浦の飛行場ではないかと言う声があった。少し離れて平屋の建物があり、そこで引率して来た兵と平屋にいた

兵が、小さな声で囁いては別れる姿を、暗闇の草地に座らせられて見ていると、日中あれだけ陽気な兵だけに不吉なことばかり思い浮かんで来た。

どのような話になったのか、また元の道に戻り出す。大通りに出ると軍用のトラックに乗せられて走り出す。運転台からも兵隊が出てきて、荷台の上は賑やかになった。中の一人が煙草を出すと、他の兵隊も同じように吸えと勧めながら愛敬を振りまく。ロ助もなかなか親切だと皆で話した。ところが威興の町に入り、街頭の明かりの下で車を止めたと思うと、親切だと言っていたそのロ助が今度は強盗に変わり、我々の服を脱がし始めた。私は留置場を出るときもらった黒い作業服であったため、金にならぬと思ったのか被害はなかった。しかし背広や国民服は全部脱がされてしまった。北朝鮮の九月下旬の夜風は冷たく、それまでも寒さに耐えていたその上、上着を取られた人達は、走るトラックの上で震えていた。

威興刑務所

刑務所の中に入ると、薄暗い廊下で職員二人が身体検査を始める。私達が奥へ奥へと案内された所は独房であった。一緒に入った泊兵長と寝てみたが、縦に二人は並んでは寝られなかった。部屋の奥には便器の桶が置いてあった。昨夜まで大勢で過ごしていただけに一度に寂しくなり、上にある小さな窓から見える星をしばらく眺めていた。いつの間にか眠っていたらしく、カラコロという手押し車の音で目が覚めた。音が近づくると囚人服を着た二人から、皿の上に五の字の入った固めた飯と味噌汁が下の小さな入り口から差し入れられた。そして小声で「元氣を出すんですよ」と声を掛けられた。その二人は元検事と女学校の校長先生だと後で知った。

校長先生とは四日目に同室となり、先生は今までは淋しかったと涙を流して喜んで下さった。そして、私の姿を見て一枚のワイシャツを渡してくれた。帰国証明書に添付する写真を奉天（瀋陽）で写した時、大事にしていたこのワイシャツを着て写し、今もこの小さな写真を大切に手元に残している。

狭い独房から拘置所へ移り、今度は五、六人が一緒になって賑やかになる。中にはやはり便器の桶があり、その上にも小さな窓があった。周囲の板壁には終戦になって開放される直前に書かれたと思われる、いろいろの落書きがあり、その中には「独立万歳」と書きなぐった字もあった。私達は壁一面に書かれた落書きを日常の友として、判読する毎日だった。

ある日、佐藤軍曹が足首に巻いて持ち込んだレンズを利用して、煙草を吸う相談がまとまった。皆のポケットの隅にある煙草の粉を持ち寄った。それを集めて紙に巻き、その小さな窓から差し込む太陽の光を集める。他の者は拘置所の右側から左の入り口を、反対に左の端から右方面を共に監視人の警戒に当たる。やっと火が付き、交代で一服吸っては外へ煙を出すために小窓の下へ行く。窓に向かってそっと吹き付けると、煙は一直線に、小窓から出て行った。大騒ぎした煙草であったが、その味は木綿の味がして煙草らしくなかった。

ある朝、使役の募集があった。留置場の体験から、これ以上足が弱っては困ると思いい、早速応募した。最初の仕事は建築材の運搬であった。気持ちには元気で、柱一本担いでふらふらしていた。嬉しいことに拘置場の中では五等飯でも外で働くとも一等飯になり、その上腹いっぱい食べることもできた。早速、監視人の眼を盗み、中にいる同僚のために握り飯を作り、被った囚人帽の中に隠して持ち込んだ。腹いっぱい食べると、バンドや襦袢が腹に当たるのさえ苦しく、下へ行くこともできなかった。頭に乘せ、帽子で隠した握り飯を落とさぬよう注意しながら、両手でバンドと襦袢を持ち上げて腹から離し、ソロリソロリと拘置場へ戻る毎日であった。

食事の不満が無くなると、今度は煙草が欲しくてたまらない。使役で刑務所の外へ出た時など、大豆や茄子の葉を隠して持ち帰っては、ボイラーの上で乾燥して吸ってみた。しかしどうしても煙草らしくない。ふとお祖父さんが松葉を吸っていたことを思い出す。

刑務所の中には、高さ二メートル程の美しい形の松

があった。その松の葉をもぎ取って、乾燥して吸ってみると大変好評であった。その後、作業のため引率されて行く列は、松に向かつて大きく曲がるようになった。これに気付いた戒護課長は「貴方達は罪を犯して入所しているのではないから」と煙草の葉を少しずつ皆に分けてくれた。早速細かく刻んで紙に巻き、大きく吸い込んだところ、フラフラと倒れてしまった。

刑務所でも、空襲を警戒して防寒用の衣類を外の防空壕に疎開していたらしく、ある日取り出しに外へ出た。その日、ここでも住民の海鳴りのようななどよめきが聞こえた。尋ねると、初めて金日成が感興へ入り、それを歓迎する声だと話していた。私達はその声を聞きながら、防空壕の中から湿った綿入れの衣類を取り出していた。そこへ二人の奥さんが近づいて来た。私達はすぐその二人が北青にいた人達だと気付いたが、奥さん達の方は、囚人服を着て監視されながら働いているのが私達とは分ならず、近付いて初めて気が付いた。大きな目で口を開けたまま声も上げず、どうした

ことか膝をボンと叩いていた。その奥さん達に誰かが北青の人達の近況を聞いていた。奥さんの話によると、北青駅で一部の人が降ろされたが数日後には、皆無事に感興へ着き、元気に過ごしていると話していた。そして「元気で日本へ帰りましょう」と別れていったが、その夜はあちらでも私達のことが話題になったことだろう。

刑務所の作業も終わったのかと思っていると、終戦と共に開放された囚人が脱ぎ捨てて出て行った衣類の洗濯作業が始まった。洗ってはロープに吊るして、出征軍人の幟旗のように何本も巻き上げる。作業も一応終わり、拘留所内での生活に戻った頃、朝食後、いつもの通り朝鮮語の番号で点呼が終わり、運動のために放射状になった赤レンガの塀の中で体操を始めた。そこで全員が眼が充血し、服は上から下まで流れた血で染まった姿の五、六人の人達と一緒に。体操しながら聞いてみると、讓陽警察の人達であった。讓陽は三八度線の南であり、不思議に思って聞くと、戦闘していないソ連地区は安全だと判断して北上したと言

う。そのために北朝鮮の保安隊に捕まり、拷問によって水を飲まされたり、殴られたのだと言う。

この人達とこの日以来、同じ道を歩んでいたらしい人と満州の六四六收容所で再び話したが、水を飲まされた者は早くに亡くなったと話していた。同じく、この中の一人であった鹿兒島出身の警部を、帰国途中、今少して国府軍の管轄に入ろうとしていた老爺嶺直前の松並木の中で倒れているを見付け、声を掛けたが口から泡を吹いて既に意識のない状態であった。軍人でもないこの人達はさぞかし残念であったろうと思いが合掌した。

刑務所の中での生活にも慣れ、仲良くなった戒護課長の厚意で、囚人服を一着ずつもらうことになった。私はこれ幸いと三着ももらうことができた。この三着が満州の冬を防いでくれたことを思うと、戒護課長の厚意に感謝せずにはいられなかった。

刑務所の中は日本人ばかりと思っていたが、どんな罪を犯したのか、朝鮮の若者が入って来た。初めは、

お前達と違うのだと言わんばかりに威張り、高慢な口調で話していたが次第に打ち解けて来ると、外の日本人の様子など話すようになった。威興の町も共産化される中で、混乱しているようであった。その若者にはよく差し入れがあり、普通の米で作った餅、後で知った牛肉の刺身など驚くような初体験であった。

ある日、他の監房から私達の所へ興南の日本窒素の副工場長さんが入って来た。話を聞くと、終戦については朝鮮総督府も知らなかったらしく、国土防衛の最前線を朝鮮の金剛山とするために会議が京城（ソウル）で開かれ、必要な火薬その他の生産について協議中に、玉音放送があったと話しておられた。

いつの頃からか、またソ連兵の姿を見るようになり、しばらくして呼び出しがここでもあった。今度は短刀や拳銃で調べるのではなく、ソ連将校の静かな尋問を受けた。内容は以前と同じようなものだったと記憶している。終わってよく考えて見ると、日本の場合と違い最初の尋問書が本人と一緒に移動していない

ことがわかった。皆と相談の上、今度刑務所を出たら、憲兵を隠して一般兵科となって帰国しようとする。相談する。

刑務所を出る頃になると、かなり自由になっていたのか、望楼の近くで遊んでいた。そこへソ連兵が来て、言葉は分からぬが小石で地面に書いた望楼の、ある個所を撃つと言っていることが分かった。皆の見ている前で自動小銃を腰に当てて一発発射すると、地面に書いた望楼の場所が飛び散った。得意になったソ連兵の顔を見ながら、射撃の上手なものには驚いた。

後日、延吉の収容所で後から入って来た部隊があった。全員が兵隊のようで、将校はいないのかと思っていたところ、終戦後に一週間の戦闘をした際、ソ連軍が青い将校服を狙い撃ちして来たと言う。そのため、将校も一般兵の服を着て戦った話を聞いた。

興南捕虜収容所

ソ連軍のトラックに乗せられて刑務所を出た。北青を出る時はフラフラの我々であったが、今度は作業を

しながら大食していたので、皆元気であった。トラックは四カ月前に憲兵学校から威興憲兵隊に赴任した際、通った道を走っていた。トラックは大きく右に回った。近付いて来るのは、元少年刑務所だと言う。近付くと門の両側にソ連兵が一人ずつ歩哨に立ち、中からは我々を大勢の日本兵が眺めていた。

決められた小さな部屋に落ち着いて間もなく、威興憲兵隊の皆さんが尋ねて来てくれた。軍曹など古い人達は話が弾んでいた。私は同期の有福上等兵を探したが見つからなかった。威興憲兵隊の人達は金を持っていたらしく、私達にも分けてくれたが、我々には僅かな金を分配されただけで、残りは全部軍曹が管理すると聞いていたが、そのままもらえなかった。後に、延吉の六四六収容所内で泊兵長は、この件で軍曹を追っ掛け回していたことがあった。

夕食になったが、各自はそれぞれ食器が必要だと知らされ、ブリキ板で紙細工のように折り畳んで食器を作り、やつと夕食をもらうことができた。しかし、夕食は、トウモロコシの粉で、元は工業用の糊であると

教えられた。その中に野菜と干したメンタイ魚が入ったもので、その上に量は小さな缶詰の空き缶一杯と少しであった。皆、不平を言いながら水をガブガブ飲んで寝てしまった。

ところが、この少年刑務所は南京虫の巣窟で、寝入ると顔の上からポトポトと南京虫が落ちてくる。暗闇の中で、何だろうと叩きつぶすといやな臭いが残る。その後この收容所を出るまで、昼は針を作り隙間の南京虫退治、夜は枕元に紙を拡げ這って来る南京虫の足音に神経をとがらすという、悪戦苦闘であった。

ここは日本へ帰る第一歩であって、もう三回も出発したという。「今度はいつ頃になるだろう」と親切に教えてくれた人がいた。それからは「ダバイ、ダバイ東京」とソ連兵の出す指の数が收容所内を飛び回り、落胆と喜びの毎日が繰り返されていた。

列車は南下でなく北上

鉄条網の外を動哨中のソ連兵は日本について知っていることと言えば「東京」と、偉い人は「東條さん」

だけのようであった。そんな兵が我々からいつ帰れるかと何十人もの人に尋ねられ、適当に「ダバイ、ダバイ東京」といっては指を出していたのであろう。私達は騙されていると思いつつも、帰れるかもしれないという期待で指の数を信じようとした。

そんな中で、急に出発することになる。それは十一月の下旬頃ではなかったかと思う。何も私物のなかった私達にも、今度はブリキで作った食器が腰でガラガラと鳴り出した。駅に着いてその日は駅前広場に野営をすることになる。夜に入るとあちらでもこちらでも暖を取る焚火が燃えていた。翌日、新北青憲兵分隊の我々に列車炊事をするようにと命令が来て、城戸軍曹以下五、六人が早速用意にかかる。

三〇トンの有蓋貨車の中にドラム缶五本に水を満たし、付近から薪を集めて小さく割る。しかし斧も無ければ鋸もない。これで千人の食事ができるのかと心配になる。

その夜、何の前ぶれもなく動き出した汽車は、願っ

ていた釜山へ向けて南下するのではなく、北へ向かって走っていた。この列車は時には登り坂になると途中から逆戻りすることが多く、その度に蒸気圧を上げて再度挑戦するのには驚いた。

ある日ふと気付くと、坂道で列車があえぎながら上り始めると、線路の横を手を振って歩いて行く人が何人も見えた。警察官や一般市民で、無理矢理連行された人達が逃亡していたのだ。数日して発覚したのである。車両の外から鍵を掛けるようになった。その影響で、それまで水と薪の確保は適当に人を集めていたが、その後は海軍の若い兵隊が専用となった。

新集めには苦勞した。ソ連兵は、集まらないとなると、時には橋の欄干や電柱を倒せと命令を出した。そして驚いた住民が騒ぎだすと自動小銃を乱射して追い払っていた。

何日か走って大きな駅に着いた。夜が明けて外を見ると、雪かきと間違え程の霜の朝であった。買い出しから帰った者の話によると、この町は、艦砲射撃を受け

たらしいと聞き、私は終戦前の北青の夜に聞いた轟きを思い出していた。そしてこの町は多分、清津であろうと思った。

私達の近くを白い息を吐きながら寒そうに仕事場へ急ぐ大勢の人達の姿を見て、これからの寒さをどのようにして凌げばよいのかと一度に心配になる。

列車炊事は水や薪の制約で、努力しても千人の食事は無理であった。その時、一日一食がやつとであったと後で聞いた。その皆の空腹を満たすために、本部はソ連軍と交渉して、売りに来た色々の品をまとめて買うことになる。各車両からの注文で、婦人や子供が売りに来た品が本部車両に次々と手渡しで運び込まれていた。品物を全部受け取ると、ソ連兵は帰れと手で合図をしている。しかし婦人達は金をもらわずには帰れない、そこで騒ぎが大きくなるとソ連兵は空に向かつて発砲する。「ロ助の馬鹿野郎！」と叫ぶしかなかった。とうとう支払わぬまま発車した。

我々の不安な北上とは反対に、南下する列車には父

や夫に会える喜びを胸に、笑顔いっぱいソ連の母子の集団が乗っていた。人形のような可愛い子供が手を振って、すれ違う度に、戦争は終わったとはいえまだ安定してはいないと思われる北朝鮮の地に、子供を連れて汽車で向かうというソ連国民の大胆さに驚くと共に、子供の教育を考えたとき、日本では考えられぬことだと思った。そして数も分からぬ兵がいることを思い、教育に関心が無いのであろうと話合った。

いよいよ国境に近い駅の引き込み線で二、三日止められたが、後から隣の引き込み線に入った車両に妙な兵隊が乗っていた。よく見ると軍服は着ていたが、南方の兵と同じように垂れを付けた略帽を被っているという小さな兵隊であった。後で分かったが、この列車の一行は北朝鮮の平壤（ピョンヤン）の陸軍病院で働いていた看護婦さんの変装であった。この列車は私達の少し前に延吉に着き、同じ六四六収容所に入ったと後で聞いた。

国境の駅に着くと、大勢の住民が満州紙幣を持って、言葉巧みに朝鮮銀行券と交換のため煩わしい程

やって来た。朝鮮銀行券の半額の満州紙幣と交換してもらっていたが、翌日、国境を越えて凶們に着くと、朝鮮系七四％の間島省だけに朝鮮銀行券が有力で、前日交換した人はまた半額となり、一気に二五％となつてしまい、残念がっていた。

金についてはソ連の軍票が羽振りをかかせていたが、ソ連軍が撤退するとその軍票は紙屑となり、そして八路军の軍票から国府軍軍票へとその都度、泣き笑いを重ねたものである。

凶們を出発した列車は、夜明け前の薄暗い延吉の駅に着く。ホームには駅員の姿はなく、時々白い息を吐きながら通るソ連軍将校がかすかに見えていた。明るくなってよく見ると、その将校達は軍人の魂として大切にしていた抜き身の日本刀を杖に、カチカチと音を立てて歩いていた。それを私達は残念な気持ちで貨車の中から見守っていた。

シベリアへ直行かと心配していたが、下車の命令が出る。ホームに降りると満州はやはり寒いと感じた。

そのホームに降りるとアルミの食缶が置かれており、蓋を取ると驚いたことに中の赤飯から湯気が上がっていた。我先にと手を突っ込んだ。後に私が平壤病院へ入院中、看護婦さん達の話の中に、食べる暇がなくてホームに赤飯を残して出発した話を聞き、お礼を言つて話に加わつた。

間もなく延吉大橋に出る。橋の上から見下ろすと川は結氷しており、子供達がはしゃぎながら滑っていた。冷たい住民の視線を浴びながら町中を過ぎた頃、元官舎らしい建物が並んだ地域を通る。どの家も屋根の木造部分は燃料になったのか下の赤レンガだけが淋しく立っていた。そんな話を話しながら進んでいると、右の草の斜面に男の死体が転がっていた。終戦直後の激しい混乱が想像できた。この死体は翌年二月か三月頃に通つた時にも同じ姿で転がっていたが、寒さの中で水分だけ無くなったのか、ミイラのように細くなっていた。

大田正氏の『満州に残留を命ず』には、「終戦直後の八月十九日延吉で暴動により、官舎や市内の日本人

の家は暴徒によって強奪された。中には首に縄を巻かれて地面を引き摺られ、また殺された人もあり、この事件で一家心中や気の狂つた人もあつた」と書かれている。

六四六收容所

延吉のある間島省は、人口八十三万二千人のうち朝鮮系が六十一万七千人を占めていた。そのため朝鮮民族の勢力が強くて治安の悪い地域でもあつたようである。今も朝鮮民族自治区として存在しているのを見ても明らかである。その頃も朝鮮服を着た人が多く、満州へ来たようには思えなかつた。

駅からの道を追われながら、やっと着いたのが六四六收容所で、鉄条網に囲まれた赤レンガの立派な兵舎が並んでいた。営庭に入る所に門があり、ソ連兵が二人立っていた。私達は数を調べられるため、初めは四列の横隊に並んだが、駄目だと分かり十列の縦隊に並んだ。しかしソ連兵は、度々元に戻り一から数え直すのには驚いた。イライラする私達を大勢の日本兵が兵

舎の中から眺めていた。

やっと終わり、我々は隣の大きな雨天体育館なのか、倉庫なのか、そちらの方へ全員が入れられた。その建物の一角に大隊本部ができた。隣の小部屋には新北青憲兵分隊から一緒に来た者が、全員本部要員として集められた。この大隊は「病十一大隊」とか市民が多くいたためか「市民大隊」と呼ばれていた。名前の通りソ連兵に通行中に拉致された市民の人も多く、また軍籍を隠していた人もいたようである。

ある日、護衛憲兵曹長を連れ元東京の憲兵司令官をしていた中将が来たと言き、どんな人かと思つてみた。暗い所に休まれていてよく分からなかったが、数日後、護衛憲兵を残してソ連に連行されたと言いた（この人は多分、加藤中将ではないかと思つている）。

私達の任務は、毎朝、舎営司令官に大隊の現況報告に行くこと以外には仕事らしい仕事はなく、のんびりと過ごした。しかし、冬は次第に過酷さを増してきた。朝の寒気の中を舎営本部へ向けて走る時、威典刑務所でもらった薄い囚人服では肌まで通す寒風に震え

ていた。

ある朝、私の姿に司令官が「お前は軍人か」と声を掛けて来た。訳を話すと司令官は「軍服を支給しなくてはならぬ」と言ってくれたが、それから軍服がもらえたのは発疹チフスが全快し、退院した昭和二十一年二月であつたと思う。その間、軍隊の夏の襦袢と袴下、そして北青留置場でもらった黒の薄い作業服、威典刑務所で女学校の校長先生にもらったワイシャツと囚人服三枚で過ごしたが、これだけで零下三〇度以下の気温にも堪えられたことが不思議に思えた。そのためには、夜は列車炊事でもらったドンゴロス三枚が毛布の代用であり、また、セメント袋を着ることによつて体温の流出を防いだ。

私達が入所してからも、次々と部隊が入つて来た。その中に古茂山で終戦後も一週間戦つた部隊が入つて来た。武装解除後、歩いて興南まで南下し、再び延吉まで来たと言う。その間食料の支給も無く、空腹でリング園に入つたり、また隊列から遅れた兵もソ連兵に

多く射殺されたと話していた。見るからに疲れた姿は哀れであった。また一方では次々と千人単位でシベリアに向けて出発して行く。無事目的地まで届くのかと思う程重い足取りで歩いて行く姿を見る。

この延吉の六四六の病院には、時にはシベリアからの病人が返送されて来た。その中に樺太から来た人がいたが、樺太も野菜が不足していたのか、シベリアへ上陸した時には付近の草がちまちま無くなったと話していた。

収容所の中では毎日、薪取り、死体運搬、埋葬するための穴掘り、食料の受領、ソ連軍の使役等、大勢の人が働いていた。歩哨兵の動きを見ると、将校が時々来ては小声で話して帰って行く。その将校の忙しい様子に比べ兵士はのんびりとして、日本とは反対だと思つた。

日本の情報を得るための唯一の方法が、一日中鳴っている衛兵所のラジオであった。音楽好きのソ連兵の留守を見てダイヤルを回して見るが、すぐ帰ってくるため日本語放送を聴くことはできなかった。しかし、

既に南方や中国方面は続々と引き揚げており、残りはソ連地区だけだと皆で噂をしていた。そんな時だけに、今にも引揚げが始まるだろうと思つていた我々は、前にも書いたが「ダバイ、ダバイ東京」と言つて出す指の数を数えては、ソ連兵に騙され続けていたのだった。ソ連兵は日本で一番偉い人は東條さんであり、日本へ帰ると言うことは、東京へ帰ることであると思つているらしかつた。

私達は、朝夕二度の少ないコウリヤンの食事に堪えて日夜思うことは、一日も早く復員して腹いっぱい食べたいということのみであつた。そのため、毎晩夢の中では家に帰つて家族や友達と宴会をしていた。朝目覚めて、その夜家に帰つた夢を見ずに朝を迎えたと分かる、その日は何か不吉なことが有るのではないかと不安な一日を過ごしたくらいであつた。

ある日、長身の大隊長が泣きながら帰つて来た。各大隊長は営庭の隅にある神社の前に集合を命ぜられ、その目前で若い三人の日本兵が射殺されたと言う。そ

の日、ソ連官舎の使役をしていた時ペーチカが爆発し、その爆発でソ連兵一人負傷したのは、その三人が故意に計画したものとして、責任を取らされたそうである。神社の前に立った三人は「我々では無い、もう一度調べてくれ」と叫びながら、負傷したソ連兵の自動小銃に依って射殺されたと言う。多分石灰の中に火薬が混入していたのではないかと思う。戦争も終わり、故郷で待つ親兄弟のことを思うと、残念だと、悔し涙を大隊長と共に流した。

戦争も終わり、十分な食料も与えられず、ただひたすら故郷へ帰ることのみを願って堪えている我々を、どうして射殺されなければならぬのかと、それまでソ連兵が行って来た戦後のソ連地区の残虐無道な数々を思い出し、憤慨せずにはいられなかった。

ポツダム宣言の第九項には、「日本国軍隊は完全に武装を解除せられたる後、各自の家庭に復帰し、平和的かつ生産的な生活の機会を得せしむ……」と明白に書いてあったという。ソ連は日ソ不可侵条約を蹂躪し、僅か一週間の交戦でありながら、満州、北朝鮮、

樺太、千島にいた七十五万の日本車（一部民間人）を不法抑留し、過酷な労働を強制して、多くの犠牲者を出したことは終生忘れはしないであろう。

〔編注〕

田上建氏の体験記『ドンゴロスの兵隊』(一)は、第Ⅱ巻に掲載されております。

【解説】

ドンゴロスの兵隊 後日談

昭和二十二年一月四日、「マッカーサーの命により、一月十三日、東京市ヶ谷の第一復員局に出頭すべし」の電報を受けた。

家中は心配していた。隣の赤穂市の憲兵大尉が呼び出されて、銃殺になったというので無理はない。これといった心当たりもないので心配はないと思った。

しかし、皆の心配は解けなかった。父、従兄弟の三人で上京することになった。呼び出しの当日、殺人的な電車に乗って、市ヶ谷第一復員局へ向かう。途中、

交番で道を尋ねると、その都度、警官は「あなたは戦犯か」と聞く。

当時、新聞、ラジオで報道されていた東京裁判は第一復員局の裏にあって、全員、市ヶ谷の第一復員局から東京裁判へ回るということであつた。

やっと復員局に着くと、もう既に大勢が集まり、その中には「摂津丸」で帰国した人達や、延吉で世話になつた軍医もいた。軍医は残留していると思つただけに、お礼と共に懐かしく話をした。患者護送で、一人のみ許しが出て帰ることができたということであつた。

予定の十二時三十分になると、昼食をとつた日本クラブを出て、大きなビルに入った。中には米国の軍人と、そこで働く女性達が忙しそうに働いていた。

一人ずつ米兵に案内されて、階段を登って行く途中、人を見ると、働く人が小さく見えた。担当の若い将校は、日本人の二世なのか日本語の上手な人であつた。

マッカーサー司令部に呼ばれたのは、ソ連地区の状

況を少しでも早く聞き参考にするためであつたように、詳しく戦後の模様を尋ねられた。

また、ソ連軍についても聞かされた。「そういうことを聞かされたのか」、呼び寄せられた人達は、皆責任を持つて帰つた人達のようにあつた。私は残留している人達が今もなお苦しんでいることを考えると、米軍の力により一日も早く帰国できるように、見たこと聞いたことを話し、その窮状から救つてくれるよう強くお願いをした。

終わるとその将校は、英文で書いた地図を見せながら親切に「ここに帰りなさい」と渡してくれた。

翌十五日十時、京都で下車して西本願寺へ参詣した後、次に満州から持ち帰つた白旗を返すために電車で大阪へ、大阪から阪神、山陽電車に乗り継ぎ浜の宮へ降りた。

白旗観音に参詣し、戦後もずっと肌から離れたことのない白旗をお返しした。そして、色々な思いを込め深くお祈りすると共に、住職には戦後に受けた加護についてお礼と報告をした。

その夜は住職から紹介してもらった宿に一泊し、翌日家へ向かった。これで私の戦後に一応の終止符打つたのではないかと思いつつ帰途だったのである。

通化県農業試験場・

ソ連参戦・抑留の五年間

愛知県 板倉利長

私は、長野県下伊那郡巨開村に生まれました。両親は健在で、八人兄弟の長男でした。天竜川が近くを流れ、南アルプスと天竜川を眺めて大きくなったようなものです。八人兄弟のうち姉妹が五人です。

義務教育を終了するとすぐ家事の農業の手伝いで、猫の額のような田や段々畑の雑穀の手入れやらで結構忙しい毎日でした。

支那事変が始まってから、小さい村でしたが、めっきり若い人の姿が少なくなりました。時に満州国が建国以来、満州国は五族協和の国であり、日本人がその

中心になるのだと大きく叫ばれていました。中心になるため満州国の人口の一割は日本人で占めるべきだとの国策論が声高に唱えられ、徴集前の若者の満州移住が大きく採り上げられました。

町役場にも、村の掲示板にも「行け！ 満州へ」のポスターがたくさん貼られました。開拓移民には二通りありました。一つは分村という形で村の一割が満州国の荒野に新しい村を作る形式です。今一つの形は、満州国の荒蕪地に農業試験場なり開拓団を設置し、開拓の暁には分与するという計画のようでした。

そのため茨城県内原に「内原訓練所」が設置され、全国的な規模で開拓民の訓練が行われました。

長野県も東北各県と肩を並べ、この国策に協力し、多くの開拓民、開拓団を満州に送りました。開拓民は国策移民と称せられ、一旦緩急あれば軍の補強という考え方も強かったようです。

大東亜戦争の始まる直前の昭和十六（一九四一）年十月に県の強い奨めで、満州国通化県にある農業試験